

小・中全校 総合・環境問題（平成27年度）への取組み

前在イラン日本国大使館附属日本人学校 教諭

神奈川県川崎市立南原小学校 教諭 宗 像 晋 路

キーワード 現地理解教育、国際理解、国際交流、総合的な学習の時間、異文化交流

1. はじめに

イランの現地校の授業スタイルは、一斉授業の講義型である。子ども達は先生の言うことに従い、黙って話を聞き、メモをとる。暗記しなければならないことも多く、宿題もたくさん出る。点数で評価されるため、裕福な家庭の子は、放課後に理数系や英語の家庭教師をつけて勉強する。体験学習や職業体験などはほとんど行われていない。当然、イランの各私企業や教育施設にも、子ども向けのプログラムなどはほとんどない。あったとしても、受動的で講義型であり、子たちの思考力を鍛えるものではない。つまり、現地の方々と校外学習などの教育活動を計画するときに、いつも日本の小・中学校の教育のあり方を理解してもらうことから始めなければならなかった。しかしながら、話し合っ、直前まで活動内容を幾度となく確認しても、いつも予定していたことができず、活動当日の変更は当たり前であった。そこには、日本の子ども達が主体的に学ぶ教育とイランの講義型・教授型の教育の違い、本音と建前のギャップが大きいイラン独特の文化の違いが大きく関係していた。

そんな悩みを学校全体で抱えながら、イランでの教育活動も2年目（平成26年度）となった。諸先輩方が帰国し、国際理解教育・現地理解教育の担当となり、責任も大きくなった。7月には、イランのパザール全校校外学習を、総合の単元「イランの衣食住」の中に位置づけ、研究授業として行った。授業後の研究討議では、協力頂いた先生方から、たくさんの改善点を教えて頂いた。もっとも大きな課題は、やはり総合で求められる問題解決型・体験型の学習を、どのようにしてこのイランで行うかであった。インターネットや本で調べられる情報は、ほとんどがペルジャ語で、専門に勉強していないと読めるものではない。まして、環境問題などの情報は日常的には入手困難である。英語の文献もあるが、正確性に欠けたり、情報に乏しかったりする。まして日本語などない。そうすると、やはり体験を多くし、現地の人とたくさん交流する中で、知識や疑問を生み出していくしか方法がないと判断した。

2. 平成27年度の総合・環境問題における単元計画

月	主な活動内容
4月	○イランってどんな国（文化・人・民族） ○イランの地形の特徴 ○イランの気候 ○イランカルタ
5月	○全校宿泊学習 ギレブーム（カスピ海近くの少年自然の家） ○宿泊学習新聞づくり ○新聞発表会
6・7月	○これまでの学習のふりかえり（宿泊学習から学んだこと） ○メヒルースター氏（ギレブームマネージャー）による特別授業「ギレブームにおける自然活動・環境問題」
9月	○ラファットフェイ氏（イランNGOディアナ代表）による特別授業「イランの自然に生きる動物と環境」 ○モビナ先生（本校現地図工・美術講師）に聞こう「ここが変だよ。イラン」
10月	○1日環境校外学習 ロフテギヤラン（イランNGO）とのゴミ拾い活動 タグゲラノル・プラスチックリサイクル工場見学
11月	○ゴミ拾い・リサイクルグループ校外学習 ○社会福祉グループ校外学習 ○水質・大気・土壌汚染グループ 土作り活動 ○学習発表会「シンポジウム」 テーマ：「イランの環境（みらい）を守るために、今私たちができること～NGOへの提案～ by T.E.P」 ※ T.E.P=Tehran Environmental Project

3. 活動内容

①宿泊学習

宿泊学習では、学校から約420km離れたカスピ海のそばの村にある自然の家に泊まり、集団生活を学んだり、自然やそこで生きる人々の生活・文化について学んだりした。ハイキングでは、植物を観察したり、水源地の水を飲んでみたりと、自然の美しさや大切さを学んだ。一方で、ごみが至る所に捨ててあり、テヘランから遠く離れた自然の中にも、環境に問題があることを知った。



ハイキング&自然観察



カスピ海自然体験



お茶工場見学

②ゲストスピーカー

学校にイラン人講師として自然の家からメヒルスター氏を招いた。宿泊学習では学びきれなかった、カスピ海付近の自然や、その自然と密接に関わったギラン州の文化、ギレブーンの問題への取り組みについて学んだ。また、環境保護NGO団体のラファットフェイ氏を招き、イランに住んでいる動物たちと自然との関わりを学んだ。授業の終わりには、人間によって傷つけられてしまったヘビや絶滅が心配されるリスと、実際に触れ合う時間をとって頂いた。2つの授業とも英語で行った。英語の活用場として設定し、分からなかったことを質問したり、中学生と小学生で教え合ったりしながら学んだ。イランの国内の動物や自然環境をよく理解できた。



メヒルスター氏
「ギラン州の自然・文化・環境」

③1日環境校外学習

子どもたちは、イランの環境問題には、ゴミ問題が大きく関わっていることが分かってきた。改めてテヘラン市内を見ると、道端の様々なところに、沢山のゴミが捨てられていることも再認識できた。そこで、「自分たちでも何かできないか」という思いを受け、イランNGO団体と公園でゴミ拾い活動を企画した。ペルシャ語や英語の活用場と設定し、NGOの方々と交流しながら行った。また、イランでは本当にリサイクルされているのかという疑問から、テヘラン郊外にあるタグゲラノル・プラスチックリサイクル工場も見学することができた。子ども達は、まだまだ少ないが、リサイクルしている工場があることに驚いた。また、暑い工場で、ほこりまみれで働く人々がいることを知った。



NGO団体ロフテギランと公園でゴミ拾い活動



プラスチックリサイクル工場見学



リサイクルされたプラスチックの粒

④グループ学習「今、私たちにできること」

子どもたちは、これまでの学習をふり返り、「今、私たちにできること」について話し合った。子どもたちの意見から、①ゴミ拾い・リサイクルグループ②社会福祉グループ③水質・大気・土壌汚染グループに分かれて活動することを決めた。各グループごとに、環境学習全体をふり返ったこと、調べたこと、体験したことをワークシートにまとめた。図書館の本から、日本で行われている環境への取り組みを調べ、子どもたちと一緒にそのよさをイランへも伝えていこうという思いをもって取り組んだ。最初は、追求する方法が分からず戸惑っていたが、先生方の協力で個別に支援することで、主体的に活動する姿が見られるようになった。ペットボトルキャップを回収する入れ物を作って各家庭に配ったり、自分の家から生ゴミを持ってきては、朝定期的に土作りに励んだりした。また、先生方と協力し、校内研究の「話す・聴く」活動を多く取り入れ、国語科と連携をとって、シンポジウム練習を繰り返しながら集大成の場である「シンポジウム」に備えた。

～主な活動内容～ T.E.P = Tehran Environmental Project

<p>①リサイクル進行部隊</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公園でのごみ拾い ・パキスタンスクール、フレンチスクールへのリサイクル呼びかけ運動 ・地域のゴミ箱へのポスター貼り。 	<p>②Heartful Welfare for the People</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルキャップ回収、呼びかけ。 ・テヘラン脊損協会のペットボトルキャップ回収プロジェクトへの参加→車いすへ ・補習授業校へのよびかけ。 	<p>③From CO2 to O2 project</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水質実験 ・生ゴミから土作り 生ゴミを各家庭から回収→校庭に作ったコンポストに、お茶の枯れ葉(宿泊学習施設より)、ミミズ、土ともに入れて作る。
<p>提案：分別・リサイクル活動</p>	<p>提案：ペットボトルキャップ集め</p>	<p>提案：生ゴミから土作り</p>

⑤学習発表会「シンポジウム」

テーマ：「イランの環境（みらい）を守るために、今私たちができること～NGOへの提案～ by T.E.P」

平成28年度の学習発表会の1つの演目で、環境問題についてのシンポジウムを行った。観客に、保護者の方々、日本語補習授業校の児童生徒と日本人会各企業の方々と子どもたちを招き、会場を巻き込んでの話し合いを行った。3つのグループが、それぞれ今私たちが一番やるべきことを考え、提案した。子供たちは、自分たちが取り組んできた活動の



良さを画像や実物を用いながら堂々と主張し合った。提案した後は、参観して頂いた日本の企業や日本語補習授業校の代表の方々を巻き込んでの意見交換も行った。会場の率直な意見に、「なるほど」と反応する子供たちの姿が見られた。

最終的には、並列でこの3つの提案書をイランNGO 団体ディアナ代表のラファトフェイ氏にその場で、直接手渡した。子どもたちの取り組みを、イランに広めていくことを約束してくれた。

4. 考察と今後の課題

宿泊学習での体験学習を企画するときは、具体的にどのように子どもが学びたいのか、子どもにどんなことを考えさせてほしいかを写真、図、実物などを駆使して、例を挙げながら伝える必要があった。それでも食い違いがあるので、その場で、その都度話し合いながら、アドバイスをしていくことが必要であった。

それから、話しながら進めていかなければならないのは、現地の方々だけではない。日本人学校の現地スタッフや教員間との相互理解も、企画したことをより効果的に実行していく上で、非常に大切であった。それがなければ、独りよがりの企画・運営になってしまい、教育的効果も上がらない。振り返ると、日本人学校での私の役割は、体験学習や交流授業のネタや協力者を探し出し、それを日本人の教育に適した形にして日本人学校に持ち込み、先生方のすばらしいアイデアを活かした教育活動へと変えていくことだった。総合をベースに英語、ペルシャ語、国語科、理科、社会科、家庭科などと連携をとり実行することができたのは、紛れもなく各教科担当の先生方の協力で他ならない。改めて感謝申し上げたい。

今回の活動では、子ども達の主体性を引き出すのに大変苦労した。また、学校を出た時に、言葉などの直面した困難に戸惑う姿が多く見られた。その背景には、決められたルールに従い、真面目で、間違っことを嫌い、共同体への所属意識が高い日本教育文化の特性があるように感じる。しかしながら、シンポジウムでは、日本人以外の方も参加している会場の中で、自分の考えを堂々と主張する姿がたくさん見られた。子供たちの持っている力、主体的な学びを生み出すためには、各教科とのより密な連携だけでなく、私たち教員一人ひとりが、勇気を持って外との関わりを多くしていく必要がある。

テヘラン日本人学校の子供たちは、日本人以外を「外国人」と言っていた。私たち教師も、海外においてさえ「外国人」と言っていないだろうか。しかし、私たちが「外国人」である。海外において、日本人としての誇りを忘れず、「外国人」として強く生き抜く姿勢を、日本人学校の子供達に見せていかなければならぬと強く思った。